

(様式2-1)

高等専門学校¹⁾の運動部加入者における種目変更と継続に関する研究 —ソフトテニス経験者に着目して—

A study on change and continuation of athletic activities among members of sports clubs in colleges of technology
-Focusing on Soft Tennis Experienced Players-

浅野 進之介¹⁾

Shinnosuke Asano¹⁾

Abstract : In continuing their club activities, practitioners continue or change their own events. In the past, it has become clear that some students are forced to change their own events because they are placed in an environment that does not allow them to compete in their own events. What criteria do these students taking on challenges use to change their own events? In order to solve their problems, we conducted an interview survey of these students, and analyzed and discussed the content. The results suggest that "interest in the technique" of the competition leads to the desire to continue competing, and "interest and competitiveness" leads to the desire to change events in search of a more suitable competition for oneself.

Keywords : Sports culture, Colleges of technology, Club activities, Soft tennis, Selection of athletic activities

1. 緒言

「部活動」の歴史は古く、始まりは明治時代の学校制度の発足まで遡るといわれている。この活動における教育的意義は、日本のスポーツ・文化・科学・芸術等の基盤を支えるとともに、実施者の思いやりの心や自主性・社会性の育成、豊かな人間関係の構築や生涯学習の基礎づくり、生徒・学生の個性・能力の伸長、体力向上や健康増進等を図ることなど、その教育的意義の高さを評価され、教育活動の一環として今日まで歴史を刻んでいる。運動部活動においては、上述のようなライフスキルの獲得の他、将来的な運動習慣にも大きな影響を及ぼすことが明らかになっている。澤田ら(2013)は、短期大学学生を対象として、中学・高校時代に運動部活動を行っていた者とそうでない者で、その後の運動との関わりや健康生活に違いがないかどうかを調べ、中学・高校時代に継続的に運動していた者はそうでない者に比べて、1)運動への関心が高い傾向にあること、2)運動のための環境にも恵まれる傾向にあること、3)運動への心身の適性が高い傾向にあること、4)日頃からよく運動する傾向にあること、5)健康に対する関心が高い傾向にあること、6)健康状態も良好な傾向にあること、7)ストレスが少ない傾向にあること、8)性格的により積極的で、闘争心が旺盛で、主体性が高い傾向にあること^[1]を示した。澤田らはこれらの結果を踏まえ、短期大学入学前までの運動実践がその後の運動との関わりや健康生活へも影響を及ぼしており、生涯にわたって運動習慣を持ち健康生活を送っていく上で、発育期から運動との関わりを積極的に持つことが重要であると考察している。また、乾ら(2022)は、就学期の運動部所属経験が成人層の運動・スポーツ参画状況に与える影響について、就学期の運動部経験を有するほどスポーツへの参画状況が高い傾向がみられ、この傾向は実施、観戦、ボランティアの各参画方法で共通していた^[2]ことを明らかにした。このことから運動部への参加は将来のスポーツ活動に大きな影響を及ぼすことが分かる。

以上の内容から、運動部活動においてスポーツに親しむことは健康的な生活に重要であると言えることができる。スポーツ庁による第3期スポーツ基本計画では国民のスポーツ実施率向上の目標として成人の週1回以上のスポーツ実施率を70%(障害者は40%)にする^[3]と定めており、この文からもスポーツ活動の習慣化が狙いとされていると伺うことができる。ではスポーツ活動の習慣化を担う運動部活動の現状はいかなるものであろうか。

海外の課外活動は様々な異なる形式で活動をしている。例えばアメリカの高等学校では部活動にシーズン制が取られており、留学支援会社による紹介によれば1年を通して最大3つの異なる部活動を楽しむことができる^[4]とされている。このため競技への幅広い選択肢がとられ、MLB(メジャーリーグベースボール)やNFL(ナショナルフットボールリーグ)に所属するプロスポーツチームから複数の入団依頼を受ける事例も存在する。

これに対し日本は基本的に1年間同じスポーツを実施する。兼部などで複数種目を実施することも可能ではあるが、全国中学校

¹⁾東京都立産業技術高等専門学校品川キャンパス 非常勤講師(保健体育)

体育大会や全国高等学校体育大会など、主要な大会の開催日程が重なっており、高い競技レベルを求めて行うにあたってはスケジュール調整の面において難しいのである。

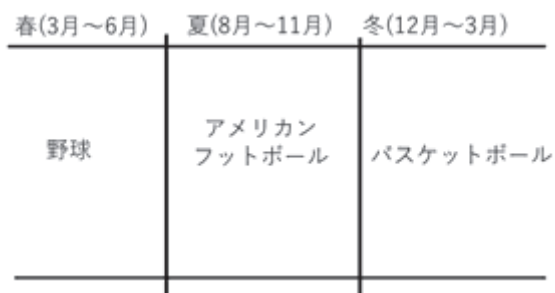


図1 海外の課外活動における活動形態のイメージ図



図2 日本の部活動のイメージ図

つまり多くの場合一つの学校に所属しているうちは特定の競技に専念することとなる。そのため進学先の学校の環境は学生のスポーツ活動の継続に非常に重要となる。塚越(2016)は2011年に文部科学省で行われた運動部活動の実態に関する研究において、少子化・指導者不足により休部や廃部となった種目の一つであるとされた「ソフトボール」を取り上げ、現役ソフトボール選手が自分の意思に反して競技種目の変更せざるを得ない状況にあった⁵⁾ことを明らかにした。

この研究から読み取れるように進学前に実施していた種目が進学先のクラブに無いことや、入部条件などの環境を理由に種目変更をすることでスポーツ活動を継続している事例が存在していた。これを踏まえると、スポーツ活動の継続はそのままの種目を続けることだけでなく、何等かの理由によって種目を変更することによってスポーツ活動自体を継続することもあるのである。

ここまでで、日本の学生選手の現状としてスポーツ活動を継続するために環境によって種目を変更することが明らかとなってきたが、異なる種目変更の事例が見られた。東京都立産業技術高等専門学校品川キャンパス(以下、産技高専品川)テニス部の事例である。

事例の内容は、テニス部への入部を希望した者の中にソフトテニス経験者がいたというものである。これは自身の経験した競技がありながら、あえて別競技への変更をした事例であり、先述した環境による種目変更とは異なる理由が考えられる。

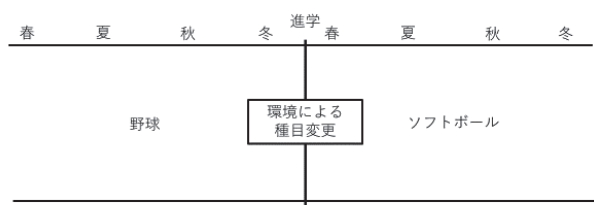


図3 先行研究を基とした種目変更の事例のイメージ図

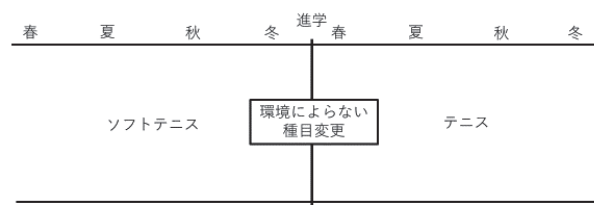


図4 産技高専品川キャンパスに見られた事例のイメージ図

2. 研究目的と方法

そこで本研究では、ソフトテニス経験者であり、産技高専品川ソフトテニス部に入部した者と、ソフトテニス経験者でテニス部に入部した者にそれぞれ調査を行い、種目継続者と種目変更者の違いを比較することで、スポーツ活動を継続する上で重要な種目変更における重点項目とは何かを検討する。本研究を通し、スポーツの習慣化が目指される現代において、部活動における競技選択などの場面で学生に対し適切な助言や適切な種目へと促す指導への一助となることができると考えられる。本学ソフトテニス部・テニス部に所属する「中学校においてソフトテニスの経験がある」1年生の部員5名を対象にWebアプリケーション「Googleフォーム」を用いた調査を実施した。

対象の5名は以下の通りである。(全員仮名)

- ・テニス部 3名 A氏, D氏, E氏
- ・ソフトテニス部 2名 B氏, C氏

質問は以下の項目を用意した。

- ・ソフトテニスを始めた年齢
- ・ソフトテニスを始めようとおもったきっかけ(自由回答)
- ・初めてソフトテニスに触れた時の感想(自由回答)

- ・中学校でソフトテニス部に入部した理由(自由回答)
- ・中学校時代の戦績(自由回答)
- ・中学校当時、ソフトテニスをやっていた時の気持ち(選択回答)
 - ①ラリーが楽しい
 - ②試合を「する」ことが楽しい
 - ③試合に「勝つ」ことが楽しい
 - ④新しい技を覚えることが楽しい
 - ⑤その他
- ・中学生の頃、ソフトテニスをやっている時には今後のスポーツ生活についてどのように考えていたか(選択回答)
 - ①高専でもソフトテニスが続けたい
 - ②高専では硬式テニスを始めたい
 - ③高専では違うスポーツをしたい
 - ④高専では部活への加入を考えていない
- ・高専に入学してから何部に入ったか(選択回答)
 - ①テニス部
 - ②ソフトテニス部
- ※回答によって質問を変更
 - ①テニス部と回答した方へ
- ・兼部をしているか(していない場合は「していない」と回答)
- ・テニス部に入ろうと思ったきっかけ(自由回答)
- ・中学校からやっていた競技を変更して良かったと思うこと(自由回答)
 - ①ソフトテニス部と回答した方へ
- ・兼部をしているか(していない場合は「していない」と回答)
- ・ソフトテニス部に入ろうとおもったきっかけ(自由回答)
- ・競技を継続して良かったと思うこと(自由回答)

アンケート結果を基に、各個人ごとに筆者が考察を行い、テニス部・ソフトテニス部ごとの共通点、傾向について検討した。

3. 結果

各対象の回答をまとめると以下のようになった。

表1 インタビュー結果一覧

共通の質問		ソフトテニスを始めた年齢(数字で記入してください)例：12歳→12
	A	12
	B	12歳
	C	12
	D	12
共通の質問		ソフトテニスを始めようと思ったきっかけ
	A	友達と一緒にだったから
	B	兄がやっていたから
	C	友達に誘われたから。
	D	小学校までサッカーをやっていて、なにか違うスポーツをはじめたいと思ったから。
共通の質問		初めてソフトテニスに触れた時の感想
	A	難しいけど楽しかった
	B	力のコントロールが難しい
	C	ソフトテニスは難しいけど、色々な作戦などがあり、面白く楽しいと思った。
	D	ラケットが重かった。サーブが難しかった。
E	ボールを打った方がいいが全然思い通りに打てなかった	

共通の質問		中学校でソフトテニス部に入部した理由
	A	体験入部が楽しかったから
	B	兄が入っていたから
	C	運動部に入りたいと思っていたとき、友達に誘われてソフトテニス部に行くと楽しいと思ったから
	D	友達の誘い
共通の質問	E	もともと運動部に入るつもりで友達も多かったから
		中学校時代の戦績(なるべく詳しく)
	A	特になし
	B	都大会二回戦敗退
	C	なし
共通の質問	D	都大会出場
	E	特になし
		当時中学校時代のソフトテニスをやっていた時の気持ちとして最も近いものを選んでください。
	A	ラリーが楽しい
	B	ラリーが楽しい
共通の質問	C	新しい技を覚えることが楽しい
	D	試合に「勝つ」ことが楽しい
	E	試合に「勝つ」ことが楽しい
		前の質問で「その他」に回答した人はその内容を教えてください。
	A	
共通の質問	B	
	C	
	D	
	E	
	共通の質問	
A		高専では硬式テニスを始めたい。
B		高専でもソフトテニスが続けたい。
C		高専でもソフトテニスが続けたい。
D		高専では硬式テニスを始めたい。
共通の質問	E	高専では硬式テニスを始めたい。
		高専に入学してからの部活は何部に入りましたか。
	A	硬式テニス部
	B	ソフトテニス部
	C	ソフトテニス部
ソフトテニス部への質問	D	硬式テニス部
	E	硬式テニス部
		兼部をしていますか？している場合は部活名、していない場合は「していない」と回答してください。
	A	
	B	していない
ソフトテニス部への質問	C	硬式野球部
	D	
	E	
		ソフトテニス部に入ろうと思ったきっかけを教えてください。
	A	
ソフトテニス部への質問	B	続けたいとおもったから
	C	やっていて楽しいから
	D	
	E	
	ソフトテニス部への質問	
A		
B		チームで指摘しあって、上達していくというのでやりがいがある。
C		技術が向上した。
D		
ソフトテニス部への質問	E	

テニス部への質問		兼部をしていますか？している場合は部活名、していない場合は「していない」と回答してください。
	A	していない
	B	
	C	
	D	していない
テニス部への質問	E	していない
		硬式テニス部に入ろうと思ったきっかけを教えてください。
	A	硬式テニスの方が大人になってもできると思ったし、体験が楽しかったから
	B	
	C	
テニス部への質問	D	中学校までソフトテニス部で高専から硬式にしようと思ったから。
	E	中学校で部活をやめたあとに友達たちと硬式を始めたから
		中学校からやっていた競技を変更して良かったと思うことは何ですか。自由に記入してください。
	A	硬式テニスはシングルスがあるので、1人で自由にできること
	B	
テニス部への質問	C	
	D	新たに気持ちを入れ替えてできているので楽しいです。
	E	少ない力で打てるようになった

質問全体において特別な傾向等は見られなかったが、「初めてソフトテニスに触れた時の感想」において E 氏以外の全員が回答の中に「難しい」という言葉を用いていた。E 氏も「思い通りに打てなかった」と難しさを表す言葉を用いており、初めてソフトテニスに触れた際に何かしらにおいて困難さを感じていたと考えることができる。また「中学校時代のソフトテニスをやっていた時の気持ちとして最も近いものを選んでください」という質問において、テニスを選択した D 氏、E 氏は両者とも「試合に『勝つ』ことが楽しい」と回答した。ソフトテニスを選択した B 氏、C 氏は「ラリーをすることが楽しい」「新しい技を覚えることが楽しい」という回答をしていた。

4. 考察

ソフトテニス部・テニス部に所属するソフトテニス経験者に対してアンケートを実施した。ここでは、得られた結果からそれぞれの回答について考察する。それらを基にしてスポーツ活動を継続する上で重要な種目変更における重点項目とは何かを検討する。

テニス部部員

【A氏】

12歳でソフトテニスを開始した A 氏は友人と一緒にだから、また体験入部も楽しかったために中学校にてソフトテニス部に入部した。初めてソフトテニスをやった時の印象は「難しいけど楽しかった」とソフトテニスの楽しさが競技開始の一番のきっかけとなったようだ。高専においてテニスに種目を変更した理由は「硬式テニスが大人になってもできると思ったし、体験が楽しかった」と回答し、競技や部活の雰囲気等の要素の他、将来のスポーツ活動を見据えた選択をしていた。競技を変更して良かったことは「硬式テニスにはシングルスがあるので、1人で自由にできること」と回答した。

【D氏】

D 氏は小学校までサッカーを行っていたが、何か違うスポーツをしたいという意思から中学校進学時に「友達に誘われた」ことを理由にソフトテニス部に入部した。ソフトテニスを始めた時の印象は「ラケットが重かった。サーブが難しかった」と回答していた。中学校時代には都大会出場の成績を残し、ソフトテニスの印象についても「試合に勝つことが楽しい」と競技性に関心を持っていることを伺うことができる。高専でテニスに転向した理由には「中学校までソフトテニス部で高専から硬式にしようと思ったから」とあらかじめ競技の変更を中学校時代より決めていたようである。競技変更をしてよかったことは「新たに気持ちを入れ替えてできているので楽しいです」と新しいことを始めることへの新鮮さを楽しんでいた。

【E氏】

E 氏は中学校にて運動部に入るつもりでいたところ、友人が多く誘われたソフトテニス部に入ることを決めた。ソフトテニスを始めたばかりの頃には「ボールを打った方がいいが全然思い通りに打てなかった」とコントロール性の難しさを感じていた。ソフトテニスへの印象は「試合に勝つことが楽しい」と競技性への魅力を感じていた。競技変更の理由については「高専では硬式テニスを始めたい」と D 氏と同様に中学校時代よりテニスへの変更をあらかじめ決めていた。しかし E 氏の場合、中学校時代にソフトテニス部を退部後友人とテニスを経験しており、高専進学前のテニス経験が積まれている。

ソフトテニス部部員

【B氏】

B氏は兄がソフトテニスをやっている影響から中学校にてソフトテニス部に入部した。初めてソフトテニスに触れた時には「力のコントロールが難しい」とE氏のようなコントロール性の難しさを感じていた。しかし、中学校時代のソフトテニスについての印象については「ラリーが楽しい」と回答し力のコントロールの課題を克服し、ソフトテニスの魅力を見出したことを伺うことができる。中学校では都大会2回戦進出の戦績を残しており、高専でも「ソフトテニスが続けたい」という思いから競技を継続した。競技を継続して良かったことについては「チームで指摘しあって、上達していくというのでやりがいがある」と、競技の上達とソフトテニスのより深い理解がされてきたと考察することができる。

【C氏】

C氏は対象の5名の中で唯一の運動部を兼部している部員である。ソフトテニスを始めたのは中学校時代であり、友人の誘いから入部を決めた。ソフトテニスに触れた時の印象は「ソフトテニスは難しいけど、色々な作戦などがあり、面白く楽しいと思った」と競技の難しさに加え、技術・戦術の多様性について魅力を感じていたようである。中学校時代のソフトテニス生活においても「新しい技術を覚えることが楽しい」と技術・戦術の要素がC氏にとって重要であることが示唆された。C氏はソフトテニス以前に硬式野球を行っており、高専進学後も硬式野球部との兼部をしている。ソフトテニス継続の理由は「やっていて楽しいから」とソフトテニス自体の楽しさに魅力を感じており、競技を継続して良かったことについては「技術が向上した」と回答していた。一貫してソフトテニスの技術・戦術がC氏にとっての重要な要素であることを伺うことができた。

調査の結果、全員がソフトテニスを始めているのは、友人か兄弟という近い関係の人物がきっかけとなっていることが分かった。この結果は中学校において非常に多い競技人口を誇るソフトテニスならではの特性であろうと考えられる。そしてソフトテニスに初めて触れた時において「難しさ」を感じていた。

高専進学後にテニスを選択したD氏、E氏及びソフトテニスを選択したB氏は既に進学前より競技の継続・変更について意思を固めていたことを伺うことができた。これに異なり、A氏はその場の環境などを含め、自身が実践して感じた感情や印象を基に競技を決めている様子であった。大塚(2020)は中学校における硬式テニス部の数の少なさから、中学校のソフトテニス競技者には潜在的な硬式テニス部志望者がいる^[6]と分析し、硬式テニスをやりたくても中学校の環境的にソフトテニスを選択しなければならず、高校にて硬式テニスに転向する事例を基にこの2競技間の人口推移の関係を示している。大塚の研究の場合、テニスをしたが中学校の環境がソフトテニスしかできないために、ソフトテニス部への入部をしたことになるが、D氏、E氏はいずれも友人の誘いでソフトテニスを始めていることから、入部の動機が競技によるものではないと考えることもできる。そのためソフトテニスを始めてからテニスへの興味が沸いたと考察することができる。また両氏は、ソフトテニスをやっていた時の気持ちとして「試合に勝つことが楽しい」と回答していた。この点においてロジェ・カイヨワによる遊びの分類に当てはめてみると、対象者がスポーツ活動を継続する上での種目変更における重点項目を見出すことができる。

遊びに関する理論をスポーツの場において展開する理由としては、スポーツの根源に「遊び」が存在することにある。スポーツの広報においては次の通りまとめられている。「スポーツ史という分野の研究によれば、英語の『Sport』は19～20世紀にかけて世界で一般化した言葉であり、その由来はラテン語の『deportare』（デポルターレ）という単語だとされています」^[7]。

デポルターレとは「『日々の生活から離れる』気晴らしや遊び、楽しみ、休養」^[7]といった要素を指す言葉である。つまりこれが表す通り、スポーツの根源には「遊び」が内在しており「プレイ論」としてカイヨワをはじめとする著名な研究者が、文化人類学的な見地から、あるいは社会学的な視点から多くの示唆を与えてきた^[8]。

カイヨワは『遊びと人間』(1958)において、遊びは次の4つに分類できると主張している^[9]。

- ①アゴン(競争) 個人・団体を問わず、また道具の有無も関係なく競争の形式をとるもの。
- ②アレア(偶然・運だめし) 独立の決定の上に成り立つゲームの一群を指す。アゴンが遊戯者の力によって結果が左右されるのに対し、アレアは遊戯者の力が及ばないところで勝負が決定する。
- ③ミミクリ(真似) その人格を一時的に忘れ、別の人格を装う虚構の世界における一人格を演じる形式をとるものを指す。
- ④イリンクス(眩暈) ジェットコースターなどに乗った時の眩暈や絶叫を表す。そうした眩暈や失神に似た状態を伴う遊びの形式をこれと位置づける。

D氏、E氏は「試合に勝つことが楽しい」と遊びの分類におけるアゴンをソフトテニスの中に捉えていたと考えることができる。対してソフトテニスを選択したB氏は、「ラリーが楽しい」とソフトテニスを実施すること、つまりはその「非日常的な時間」を楽しんでいると考えられミミクリに近いものを捉えていると考えられる。C氏は「新しい技を覚えることが楽しい」と回答しているが、イリンクスにおける眩暈は、新しいものを手にした際の驚きや興奮なども含まれており、それに類似しているものであると考えられる。

これらに基づく、D氏、E氏は自身のスポーツにアゴンの性質を持ち、より強い競技性を求めてテニスに移行した可能性がある。対してB氏、C氏はアゴン以外の性質をスポーツに求めており、自身の競技を継続する道を選んだと考えられた。

A氏は高専の進学時には、将来のスポーツ活動を見据え「どちらの方が続けやすいか」を基に競技をテニスに変更していた。また、テニスの魅力についても「硬式テニスにはシングルスがあり一人でできるから」との回答があった。

ソフトテニスも社会人クラブやプロ選手も存在するため将来において競技ができないことはない。更に実際にはソフトテニスにもシングルス競技が存在する。これにも関わらずA氏はソフトテニスにこのような認識をしているのだろうか。

この認識の原因には2点の要素が考えられる。一つ目にトップレベルの競技人口の差である。現在日本のプロテニスプレイヤーの人数は正確な数字が表示されないものの、JTAランキングには男女合わせて2000名ほどのプロ選手が載っている。対してソフトテニスの場合、2019年に初のプロソフトテニスプレイヤーが誕生して以来、現在11人(全員男子選手)が活動している。ソフトテニスは中学校部活動における競技人口は非常に多いが、年齢が上がるにつれ競技人口は減少傾向にあり、プロという括りでテニスと比較すると、トップレベルの競技者に多く差が出ている。

二つ目に競技内の種目間の有意差である。例えばテニスにおける賞金の比率を見てみる。大会で用意されている賞金のうち、最も多くの賞金が贈られるのがシングルス競技である。全日本テニス選手権98thの賞金ブレイクダウンは表の通り^[10]である。

表2 全日本テニス選手権98thの賞金ブレイクダウン(大会要項を参考に筆者作成)

成績	男女シングルス (単位:円)	男女ダブルス (単位:円)
優勝	4,000,000	500,000
準優勝	2,000,000	250,000
ベスト4	1,000,000	150,000
ベスト8	250,000	80,000
ベスト16	140,000	50,000
ベスト32	80,000	
ベスト64	40,000	

シングルの賞金が高くなる理由としては、テレビの放映の中心となる企業が支払うスポンサー料や、テレビの放映権料が原資となるテニス大会において、テレビ放映の中心となるのがシングルスであるからである。上記の大会においても、テレビで放映されたのは男女のシングルスのみであった。他の大会でもこのような傾向にあることから、テニスにおいてシングルスが主流となる傾向にある。

対してソフトテニスの場合は、ダブルスが主流となる。全日本テニス選手権98thの場合、天皇杯・秩父宮妃記念杯を争うものになっており、対象は男女シングルス・男女ダブルスの4種目である。しかし、ソフトテニスにおける天皇賜杯・皇后賜杯は男女ダブルスの2種目のみであり、シングルスが存在しない。更に一般にソフトテニスは1884年に誕生したとされる^[11]が、シングルスが加入したのは1993年である^[12]。このようにソフトテニスにシングルスはダブルスに比べて遅れて参入している歴史的事実も存在する。これらから、ソフトテニスにとって主流はダブルスである風潮が存在することが分かる。A氏の競技選択には、このような競技のイメージや風潮の影響が非常に大きいことが考えられた。

5. まとめ

本研究では、ソフトテニス経験があるテニス部・ソフトテニス部の部員に調査を行い、種目継続・変更の意思決定について考察してきた。テニスに変更した者には、スポーツにおいてアゴンの性質を重要としていた。ソフトテニスを継続した者は、ミミクリやイリンクスなど、競技的な側面以外の面を重要視していると考察された。更に競技選択の中には現在の各競技の風潮や文化も影響を与えていると考えられた。これらから種目変更の重点項目を考察すると、スポーツにアゴンの性質を有していた対象者は、種目変更を行い、競技性へのより強い興味関心を寄せていると考えられる。また、アゴン以外の性質を重要視していた対象者は、特定の技術に興味関心が強く種目継続を選択したことに加え、競技のイメージや文化が影響を及ぼすと考えられた。部活動における指導においては選手本人の意志や興味関心に合わせつつ、本人が持つ競技へのイメージに対して競技本来の魅力や技術について指導をすることで、文化やイメージにとらわれず、本人に最適な競技選択を促すことができるのではないかと考えた。

今回の調査では限られた人数の中で行われたため、より大人数のデータを基に多様な事例を見出す必要がある。また今回は「継続」と「変更」に限定したが、スポーツ活動を営む上で「引退」や「中止」などスポーツ活動をやめる行動などもある。これらも踏まえ、より多様なケースに基づいた調査を行いデータ抽出することが今後の課題となる。

参考文献

- [1] 澤田 孝二, 澤田由美: 「中学・高校時代の運動実践が後の健康生活に及ぼす影響」, 『山梨学院短期大学研究紀要』, pp82-96, 2013
- [2] 乾順紀, 長ヶ原誠, 彦次佳, ほか「就学期の運動部所属経験が成人層の運動・スポーツ参画状況に与える影響: 成人以降のスポーツ活動の多様化に着目して」, 『生涯スポーツ学研究』, vol19.No.1, 2022
- [3] 第3期スポーツ基本計画: スポーツ庁 (mext.go.jp)
https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop01/list/1372413_00001.htm(最終閲覧日:2023年11月12日)
- [4] アメリカ高校の部活動 | アメリカ留学 (americaryugaku.jp)
<https://americaryugaku.jp/%E3%82%A2%E3%83%A1%E3%83%AA%E3%82%AB%E3%81%AE%E9%AB%98%E6%A0%A1%E3%81%AE%E9%83%A8%E6%B4%BB%E5%8B%95/>(最終閲覧日:2023年12月15日)
- [5] 塚越美紀「競技者における種目変更と継続に関する研究～ソフトボール選手に着目して～」, 順天堂大学卒業論文, 2016
- [6] 大塚香菜「高校におけるソフトテニス人口の減少要因とその対策の提案」, 高知工科大学, 2020
- [7] スポーツ庁 Web 広報マガジン | スポーツ庁が考える「スポーツ」とは? Deportare の意味すること (sports.go.jp)
<https://sports.go.jp/special/policy/meaning-of-sport-and-deportare.html>(最終閲覧日 2024年1月17日)
- [8] 室星隆吾「現代スポーツの概念に内在するプレイ論の影響について」, 『東京学芸大学紀要』 2部門 33, pp221-228, 1981
- [9] ロジェカイヨワ(著), 多田道太郎(翻訳), 塚崎幹夫(翻訳)『遊びと人間』, 講談社学術文庫, 1990
- [10] 全日本選手権 (jta-tennis.or.jp) <https://www.jta-tennis.or.jp/alljapan.aspx>(最終閲覧日:2023年11月12日)
- [11] 日本ソフトテニス連盟 » ソフトテニスとは (jsta.or.jp) https://www.jsta.or.jp/about_softtennis(最終閲覧日:2023年11月12日)
- [12] (公財)日本ソフトテニス連盟 編『最新版(公財)日本ソフトテニス連盟公認ソフトテニス指導教本』, ベースボール・マガジン社, 2014